

平成28年度第2回 伊那市総合教育会議会議録

- ◎招集年月日 平成28年8月26日（金）
- ◎開催日時 平成28年9月20日（火） 午後1時30分～2時52分
- ◎場所 伊那市役所 庁議室
- ◎出席者 白鳥市長、松田教育委員長、田畑教育委員、原田教育委員
- ◎欠席者 宮脇教育委員長職務代理者
- ◎出席関係者 林伊那小学校長、武田伊那中学校長
- ◎出席職員 北原教育長、大住教育次長、北野学校教育課長、小松生涯学習課長、
捧文化振興課長、宮下スポーツ振興課長、中村指導主事、唐木指導主事、山崎教育総務係長

1 開 会

大住教育次長

皆さん、こんにちは。雨の中お疲れ様でございます。ただ今から伊那市総合教育会議を始めまいります。初めに市長からごあいさつをお願いいたします。

2 市長あいさつ

白鳥市長

改めましてこんにちは。台風16号、大変心配していたわけですが、九州、四国あたりの状況を見ますと、大雨で大変な状況になっているということですが、予報円を見ても、大分外れておりますので、この16号による風の心配も大丈夫だろうということではありますが、あとは雨がどのくらい降るかですが、国交省の方とお話をしていたんですが、データ的に見てもこの地域は他の地域と比べて自然災害が少ないと。長野県でも北信、中信、東信、南信の過去のデータをひっくり返してみても、この地域は災害が少ない。そんな話をしていました。その原因にはアルプスがあるというような事情もあるんでしょうけれど、地勢学上どういうことなのか、非常に興味があるところでもあります。今日は伊那市総合教育会議ということでもあります。先日市内中学校の生徒がということもありましたけれど、そうしたことの解決にもそれぞれ皆さんのお力をいただいて予防したりということをしっかりやっていかなければいけないと思いますので、是非一緒になってお取り組みいただくことをお願いいたしまして、開会にあたりましてのあいさつとさせていただきます。よろしくお願いいたします。

大住教育次長

続きまして、教育委員長さん、お願いいたします。

3 教育委員長あいさつ

松田教育委員長

よく教育は百年の計と言いますけれど、そう言いつつ教育改革が目まぐるしく動いているなか、ゆとり教育、いわゆる総合学習、生活科学学習を受けまして、社会人となった今の世代の若者が自己肯定感が高かったり、意外と頼もしかったりする、そして

有望であるという記事が、先刻新聞で紹介されました。このことは、以前、信濃教育会で出版している雑誌「ふるさとの大地」に、総合とか、生活科学習を受けて、お医者さんや教師になった方の体験談にもあったように記憶をしております。先達唐木順三先生は「時流を追わず時流に流されず、時流に面々相対して顔を背けないままに、根源に問い根源に参ずる」というふうに教えております。今日は伊那市の教育の根元とも言える伊那小教育をどう伊那中学校につなげていくかということにつきまして、伊那小中の校長先生からご提案をいただけるということですので、大いに意見交換を行いまして学び合いたいと思います。よろしく願いいたします。

大住教育次長

続いて協議事項に入りますが、委員長からもありました、伊那小学校林校長先生、伊那中学校武田校長先生に出席をお願いしているところでございますが、総合教育会議の設置要綱の中に、「協議を行うにあたって必要があると認めるときは、関係者または学識経験者に出席を求め、当該協議すべき事項に関して意見を聴くことができる。」という規定があり、こちらに該当しますので、出席をお願いしたところでございます。それでは、以降、市長の進行でお願いいたします。

4 協議事項

(1) 伊那中学校区における新たな小中連携の推進について

白鳥市長

最初に伊那中学校区における小中連携の推進について進めたいと思います。

北野学校教育課長

それでは、資料に基づいて、伊那小学校の公開授業について確認をいただきながら、3ページからは伊那中学校における新たな取り組みということで、武田校長先生の方からお話しいただきたいと思います。

林伊那小学校長

伊那小学校の公開授業研究会についてお話しさせていただきます。伊那小学校の公開授業研究会、公開学習指導研究会と呼んでおりますけれど、今年度で38回目を迎えることになりました。全校研究テーマが「内から育つ」ということでやっているわけでありまして、まず、私たちの持っている子ども観として、子どもが「自ら求め、自ら決め出し、自ら動き出す力を持っている存在である」この子ども観に立ち、子どもたちの求め、そして願いから学習を展開していくことで、子どもたちに学ぶ力が育ち、主体的な学習が想像できる、そのように考えています。そこで、本校では、ずっと総合学習・総合活動を中核に据えた教育課程を編成しまして、子どもと共に作り出す授業を実現しようと研究実践を積み重ねてきております。

サブテーマですけれども、本年度は「“ひと・もの・こと” とのかかわりのなかで、自己を見つめあゆみ続ける子ども」と定めまして、子ども自身がどのように自分を見つめたり自分に問いかけたりして、自らのあゆみを進めていくのかを見取りながら「内から育つ」子どもの姿をとらえようと研究を続けてまいりました。

この研究会は、本校の子どもたちの具体的な姿や学習指導の実際を公開し、ご参会の皆様と共に、教育のあり方を探っていくことを目的として続けてきております。

実際の公開内容でありますけれども、伊那小学校の全部の子どもたちを見ていただくということで、自由参観授業を行い、授業後、授業者との懇談を持っております。それから、共同参観授業ということで、1年生から6年生まで、それから特別支援学級の合計7学級を公開しまして、研究協議会を持っております。それから、学習発表があるわけですが、低学年・高学年から1学級ずつ2学級を学習発表の学級と決めて、総合学習・総合活動で学んだことをステージで、劇とか歌、いろいろな方法で発表しております。そのあとご講演をいただくということで、1日使いまして、公開しております。

公開の発信ですけれども、郵送で、長野県につきましては、全部の小・中・特別支援学校へ案内をしております。それから、今までに公開に来てくださった学校、それから、本年度学校に視察に来てくださった皆さん、それから、上伊那郡内の幼稚園、保育園に案内をしております。そのほか、学校のホームページに公開、教育雑誌に情報を掲載しております。

1ページめくっていただきまして、経費については「公開学習指導研究会」の会計がございまして、そこで賄っているわけですが、伊那市の方からも報償費をいただいております、ありがたいことだと思っております。

今後ですけれども、全国各地から伊那小学校の方においでいただいているわけですが、上伊那郡内、地元が少ないんじゃないかということで、いかに広げていくのか、いかに地元の参会者を増やしていくのかということが課題となっておりますので、そのところを進めていきたいと思っております。

それから、参加者ですけれども、平成16年から昨年度、27年度までの参加者を上げてあります。およそ400から600人前後の方に来ていただきまして、一緒に勉強させていただいているということで、ありがたいことだなあと思っております。前泊あるいは後泊していただいている人の数ですが、チラシでは旅館組合を通じての宿泊を案内しておりますので、この部分は把握しており、平成26年度は25人、27年度は18人ですが、実際には旅館組合を通さずに個人で伊那市内のホテル、旅館だけでなく、駒ヶ根市、南箕輪村、箕輪、辰野、あるいは諏訪温泉に宿泊されている方もおりますので、数は学校として把握できておりませんが、半分以上の方は宿泊されているんじゃないかと思っております。

それから、出版物としましては、毎年5～6回研究会のために研究紀要「内から育つ」として発行していますし、あと、最近ですけれども「共に学び共に生きる」として、伊那小教育の軌跡ですとか、伊那小教師の物語ということで本も出版して、こうした出版物を通して、全国の先生、教育界に対し、伊那小の努力をご理解いただこうと考えているところです。

白鳥市長

続いて伊那中学校、お願いします。

武田伊那中学校長

引き続き3ページの資料を見ていただきたいと思っております。まず左上に示したグラフは、平成27年度の全国学力・学習状況調査の状況等を示しているんですが、小中の連携をしている学校とそうでない学校の平均正答率の違いを示しています。グラフ1の方は、小中の教員の交流を行ったか、グラフ2の方は教育課程の連携を行ったかということで、良く行った学校の方が、これ国語に限っているんですけど、子どもた

ちに確かな学力がついているという傾向がうかがえるところでもあります。また、小中で教育課程が連携しているほど確かな学力がついているという傾向がうかがわれます。そうしますと、小中連携は授業レベルで連携していく必要があると思うわけです。

今までの小中連携では、ともすると小学校を中学校の準備段階と捉えがちで、中学は教科担任制だから「時間を守れるようにする」とか、中学はこういうきまりがあるから「守れるように」して来いとか、「家庭学習」はこういうところが大事だからとか、そういう面が強調される傾向にありました。

しかし、授業レベルの連携を進めていくことが、子どもたちに力をつけていくうえで重要だと考えており、授業レベルの連携とは、授業の仕方とか授業の展開、つまり方法になると、先生方が先生方の力を発揮できにくくなる。一方、掛け声だけの連携ではだめだということで、授業観や子ども観を共有することを目指す連携をやりたいということでございます。

2番のところで、何をするかということでございますが、具体的には伊那小学校の公開日は2月の第2土曜日ということで決まっておりますので、その前日の金曜日の午後、伊那中学校を公開したいと思っています。なぜかということですが、伊那小学校では先ほど林校長先生から話がありましたように、「内から育てる」ということで子どもたちの生活に根ざした総合的な教育を推進していると認識しています。また、伊那西小学校では、豊かな自然環境を生かした教育を受ける、そういう教育を受けた子どもたち、そういう子どもたちだからこそできる教育があるのではないかとこのところが視点でございます。

2点目は右下にグラフがあるんですけど、伊那小学校の公開参加者、26年と27年を表しているんですけど、約450人のうち、10数パーセント、20パーセント近くはリピーター、つまり、前の年もその前の年も来ている人たちです。こういう人たちはどちらかという学年を追って行って、4年生を見たら次の年は5年生、その次は6年生と見ている人がいるので、中学に行ったらどうなるのかと興味を持っている方々だと思っています。それから、伊那中学校職員にとっても、伊那小・伊那西小の教育を理解し、発展させることにつながっていくのではないかと考え、授業をすることにしました。

具体的にどうするかということですが、本年度については、伊那中学校の4クラスを公開したい。1、2年生を考えております。3年生は入試前なので公開しないことを考えています。テーマは、伊那中学校では今年度より「ふるさと伊那谷学」を進めておりますが、その中のひとつの視点である「アクティブラーニング」これを視点にしていきたいと思っております。

何がポイントなのかということですが、この中学校の授業づくりに関して、小学校の先生にも参画していただく、一緒に授業を作っていくということでございます。今までも小中の授業参観というのはお互いにやってきているんですけど、どちらかという批判的に見合うということが多かったと思うんですけど、授業観や子ども観を一にして中学校の授業を作ろうという取り組みはなかったように認識しています。その中で何が変わるのかというのが3番ですが、新たな概念の小中一貫教育を実現することを目指すということで、今まで言ってきたように、小中一貫・小中連携は、情報交換を進めること、教職員の交流、一貫したカリキュラムの作成などを今まで行ってきた、それなりの成果は冒頭にも申したとおりにあったと思うんですけど、子ども観や授業観を共有しての連携はなかったと思っています。この共有する授業観・子ども観については、先程林校長先生から説明があったとおりです。二つ目でございます

けれども、中学校でどうなるのかということも小学校の先生が知ることは、今度は小学校側の授業をさらに良くしていく視点になっていくんじゃないかと思います。伊那小学校教育のひとつの評価、見方としては、中学の出口でどうなっているかということも大事になってくると思います。それから、最後になりますけれど、伊那小学校の教育は全国的にも稀有な教育であると認識しています。その成果について興味を持っている人は全国に相当多数いると思っています。中学校での子どもたちの成長を公開することで、さらに全国に強く発信することができるのではないかという気がします。括弧に書きましたけれど、21世紀型学力あるいはアクティブラーニングと言われますけれど、今こそ、伊那小教育を強く発信する時ではないかと、これから変化の激しい時代を生き抜く子どもたちにとって、内から子どもたちを育てていく、そうした教育が重視されていくべきだと中学校側でも認識をしております。

推進上の課題ですけれど、伊那中学校の公開研究会では参加費をいただく予定はありません。しかし、公開すると印刷費や通信運搬費が課題となってくると思っていますが、今年度につきましては、伊那市教育委員会のご配慮で何とかなるのではないかと考えています。二つ目ですが、これは人事的な課題で、伊那小中の人事交流も今後推進していく必要があると考えています。三つ目は将来的ではありますが、学校区の小中連携を進めていくスーパーバイザーまたは連携コーディネーターみたいな人がいると非常にうまく行くのかなと思いますけれど、それは将来的なことであって、当面はこの中学校における公開授業を軌道に乗せたいというふうに考えています。

まとめとしてということで書きましたけれど、少子化が進む中で一人ひとりの子どもが地域を担う重要な人材でございます。これから求められる教育は、大人が求める資質や能力を持った人材を画一的に育成することではなくて、一人ひとりの個性を活かして、もともと一人ひとりが持っている可能性を最大限に伸ばすことであるというふうに思います。そういった力をつけていくことが郷土に愛着を持ち、変化の激しい時代を生き抜く力をつける教育である。こういった教育は、やはり、内から作っていくものだと考えております。そういった意味で小中が連携をして、9年間を連携して行きたい。その一歩として、本年度より公開研究会を始めたいと思います。

白鳥市長

小学校、中学校から連携をしながらやっていきたいという話がありました。このことについて皆さんからご意見をいただきたいと思っています。先日東部中学校で3年生と意見交換というか、「市長と語りた伊那」というのをやりましたけれど、やはり私たちが積極的に関わりを持っていくという姿勢がうんと大事だなと思ったんです。黙っていると生徒はその世界の中でそれぞれ答えを出して、その答えの中で人生を歩み始めてしまうという、その中で、例えば私が呼びかけたのは、「伊那というのはとてもいい地域だ。」と、「そのいい地域というのは具体的にこういうものがあったり、働く場所についても選択肢がいっぱいあるよ。で、なんでかんで都会で生活するという選択を今から決めなくていいよ。」というような話をして、その中で、子どもたちから「伊那で生きていきたい。」というような意見を言う生徒もいたんですね。やはり私たちも地域づくりということを声高に言っているんですけど、それと同時に人づくりをやっていかないといけないということを感じました。それで、「東部中学校以外でもやらないのか。」という話をされたんですけど、とてもいい意見だなと思って、違う学校でも、私だけでなく今ここにいらっしゃる皆さんが言って話をする。そんなことが大事じゃないかなと思いました。よくあとで考えてみましたら、伊那小学校で2回や

っているんですよ。小学校6年生と「市長と語る会」っていうのは、その時もいっぱいいい意見が出ましたので、子どもたちっていうのは、こちらの方から能動的に積極的に持ちかけていくと一緒にって同じことを考えていく、そんなことがこれからはもっと大事になるんじゃないかと感じましたね。どうぞ、今の小中学校の連携についての思いとか、意見を。

松田教育委員長

伊那中の武田校長先生の方から話がありまして、研究を共有するという新しい小中の連携ということをお話しくささいまして、極めて画期的だと思います。今までの小中の一貫と違う視点から取り組んでくださっていることに、大変ありがたい思いであります。伊那中の校長先生のお話をお聞きしておりますと、今、盛んにアクティブラーニングということをやっている、言葉が頭の上を飛び交っているんですけど、実は今まで伊那市の教育が大事にしてきたこと、そのことがもうアクティブラーニングであると思っていますので、さらに伊那市の教育を深めていくことが、今言われているアクティブラーニングを深めていくことにつながっていくことになると思います。問題提起は、伊那小のテーマが「自己を見つめあゆみ続ける子ども」って言うんですね。この「自己を見つめる」というところがとても大事で、違う言葉で言うと、抽入は知識なんですね。自己を見つめるというのは知恵なんです。知恵を高める子どもの育成ということなると思うんです。知恵を高める子どもの育成っていうのに道筋があると思うんですけど、その道筋がないと分かりにくいし空回りしてしまう。例えば、教材は地域に根ざす。それから授業の姿は体験を重んじる。それから友との関わりを大事にして展開していく。そして学習の定着のための習熟学習をきちんと位置づける。そういうことがないと、自己を見つめるということが、頭の上を飛び交うようになってしまうと思うんですけど、こういうところを中学はどういうふうに見て止めているかお聞きしたいと思っています。

武田伊那中学校長

松田委員長さんのご質問であります、特に中学校においては授業をする、先生たちが子どもたちに授業をするのが教科書の内容をより能率的に伝達するところに、かなり重きが置かれているところに課題があると感じています。今度、伊那中で始めました「ふるさと伊那谷学」のスタートもそこにあって、教科書は教科書で使わなければいけないんですけど、「それだけでなく子どもたちの身の回り、子どもたちの生活の中に教材があるでしょ。」っていうことを中学校の先生にも気がついていただきたいということで、普段子どもたちの生活の中にそれを通して学ぶことがいっぱいあるんだけど、それはちょっと横に置いてあって、紙に書いた教科書のことを学んでいるので、実際の生活、実生活の中で活かさないというんですかね、教室で学ぶことが実生活の中で活かさないという傾向があるのではないかと感じておまして、今のお話にありましたように、教材は地域、授業はできるだけ具体的にというところは、まさにアクティブラーニングだと考えています。

白鳥市長

ほかにどうでしょうか。

白鳥市長

伊那東部で先日、国土交通省に行って実際のいろんな現場の勉強をしたという話があったんですね。ある子どもは重機のオペレーター、実際のバックホーを動かしたり、ある子どもたちはゴミ拾いをしてみたりとか、いろいろな現場で東部の子どもたちがやったことが簡単な自分の思いとして書かれたものがあったんだけど、非常に大事なことだなあと思ったんですね。次のキャリア教育にも出てくると思うんだけど、この地域の事象、ことがらについて実際に足を踏み入れて勉強していく。その学んだことを次のところに活かして更に高めていくことかなあと考えてみたんですけど、今、武田校長が言ったように「伊那谷学」「ふるさと学」って言うかね、まさにそのとおりで、実際に知らずして、世界地図のどこかを覚えたところで、基本的な大事なところが抜け落ちたところに何か作ろうとしてもできっこないということがあると思うんですね。ちょうど「伊那谷ふるさと学」という話ともうちょっと先行するんだけど、民間企業の中の「伊那谷学」をやろうということで既に3年前ぐらいから動いているんですね。やはり故郷を知ることがいかに大事なのか、そうしたことによって日本の中の伊那の企業とか、世界の中の伊那の企業とか、そうしたことが段々に高まりつつ行けるのに、地元のことを何も知らずに過ごしているのは間違いじゃないかということで「伊那谷学」が具体的な動きとして来ているので、できれば子どもたちの取り組みとも連携ができればいいと思いますね。

北原教育長

とても大きな提案をしていただいていると思うんですけど、例えば、小中連携についても市内の小中連携推進委員会では合同研修会をやりましょうとか、合同教科会をやりましょう、それから小中相互の授業参観をしましょう、等々やっているんですけども、実は先ほど武田校長言ったとおり、割合と「点」になってしまっているところがあるんですね。ですから、今後この取り組みが非常に参考になってくると思うんですけど、「線」になり「面」になっていくきっかけに大きくなるなあと考えて、大事に考えて行きたいなあとということです。

さっき説明のなかにもあったんですけど、3ページの右上のところですかね、授業のレベルの連携のところ、「点」になっているのがここだと思うんですね。こういうことを繰り返していくなかで、子どもたちは結局は自分で問題を解決していくためには、これまでの経験をいかに活かしていくかということにあるんだけど、そうしたつながりを小学校で行い、また、中学で行っていくと、子どもはすごい閃いたりとか、すごい考え方をするんですけど、こんなの突然起きっこないんですね、前に何かそういう経験がある、または、何か学んでいることがある、そうしたことで戻っていくと、先生がそうしたことに気付くことが大事なんですけれど、子どもたちもお互いに「ああそうか、そういうことだったら自分でもよく分かる」とか「できる」とか、というふうになっていく。そういう意味で、きっかけとしてとても大事に考えたいと思います。

白鳥市長

武田校長が県にいる時にたまたま話をして、伊那の小学校と保育園が一緒になって先生を派遣したりする取り組みをしているっていうことが、かなり先進的で画期的だろうという話をしたことがあったんだけど、あれはもともと課題が見えていたのでやったんですね。それ以外の副次的な成果も出たという事例があって、それはひとつには小学校に上がった保育園児が3月31日から4月1日になった途端に学校に行けな

くなっちゃうとか、外れちゃうっていうことに、どこにあるんだろうということ、保育園の保育士たちが小学校に行って、半年間二人ずっと研究というかよくよく見て、それを毎週毎週保育園へフィードバックして、保育園でそれを解決してっていうことを繰り返してきた。それによりうんと階段がフラットになって、やっと入れるようになった。もうひとつは、小学校の先生がこちらにいる3年間のうちに必ず全部の保育園に来て勉強しましょうということを課題として与えて、相互に行ったり来たりする中で子供の成長を促していくという共通のテーマを共有しながらやってきているということで、非常によくなったなあという実感があるので、今後、伊那小学校の総合学習を中学に持っていった時に、私から見ると、小学校が中学校に期待したいもの、こういうことを6年間やってきて、中学校でスパンと切れてしまうんじゃないかと、こういうことを継承してさらに大きくリカバリーして行ってほしいというようなことと、一方では中学校からすると、小学校の総合学習ではこんなこともテーマ、ポイントとして中に織り込んで、6年間やってきて中学に継承してほしいとか、そこら辺の意見交換が大事じゃないかと思うんだけど、そこら辺で可能性としてはありそうかね。急に言っても分からないかもしれないけど。

武田伊那中学校長

夏休みの研修として本校で4クラス公開する授業者が決まっているので、その方と伊那小から二人、教頭先生と研究主任の先生と合同の研修会をやったんですけれども、その時に私が強く感じたのは、中学の先生だけだとどちらかという、教材をどうするとか、授業の展開をどうするとか、そういった議論に終始しがちなんですけど、そこに小学校の先生が入るとやはり子どもの話が出てくる。子どもの視点が出てくるということで非常に本校の職員も刺激になったし参考になったと思うし、伊那小の先生も教材はしっかり研究しなけりゃだめだよねという話にもなったみたいで、市長さんおっしゃるように小中でそういうお互いの教育観や子ども観、あるいは子どもに対する見方をもっと胸襟を開いて話すということは間違いなく必要なことだと思うんですが、どちらかという、作られた連携なので、合同教科会やりましょうみたいになっているので、そこを少し進めたいなと思います。

林伊那小学校長

やはり子どもをベースにして連携ができるのではないかと思います。中学校の授業づくりに小学校の教員が参加させていただくことになると、例えば、中学校の教室でこの授業を作っていくという時に、具体的な子どもの姿を思い描くんですね、「この子は小学校の時こういう学びをしていたんです。」とか、あるいは、「この子たちは小学校では総合の時間にこういうことをしてきて、こういう力を付けている。だから、中学ではこういうことも可能じゃないですか。」ということも言えるんじゃないかと思っています。逆に中学で授業づくりに関わるなかで、もう一回小学校の先生が小学校の授業を見詰め直して、「中学でここまでやろうとしているんだったら、小学校でもここまで大事にしなきゃいけないね。」とか、「ああ、小学校で自分たちが今、子どもたちと接しているとき、ここは大事にしていかなきゃいけないね。」とか、中学で授業づくりをすることによって、今の小学校の授業づくりだとか、子どもたちとの接し方、伊那小教育を見つめ発展させる契機になるんじゃないかとそんなふうに思っています。

白鳥市長

はい、どうでしょうか。

松田教育委員長

そのことに関連して、この前7月でしたか、内山節先生にお越しいただいた時に、ある校長先生が「小学校5年生で米作りをする。そして中学でまた米作りをするってことはなにか学習の繰り返しになっていくんじゃないでしょうか。」っていう質問をされたんですね。そうしたら、内山先生は「それは違う。つまり、農業なんていうものは1年やって分かるようなものじゃない。小学校の時にやった米作りの体験と中学に行ってやった米作りの体験とが重なり合うことによって、より一層地域の農業が見えてくる。だから、同じようなことをやっているというような捉えはいかがなものでしょうか。」ということをおっしゃったんですけど、今年、伊那中学校は大規模な米作りをしてくれているんですけど、その中で子どもたちが小学校とはどういうふうに違う気付きをしているのかを記録して資料としてもらいたいと思います。そうすると、小中連携ということが、具体的な子どもの事実を通して見えてくるというふうに思うので、期待をしているところです。

田畑教育委員

今さらそんなことを聞くのかというようなことなんですが、連携の中で親の立場から確認したいこととして、自分が小学校、中学校と進んでいくなかでは全然生徒として意識していなかった。親もあつたのかどうか分からないですけど、伊那小の星組から転校して東部中に行きました。それで、小学校と中学校の先生が連携してっていうふうにおっしゃただけだけど、子どもというものを中核にして、その子はこういう学びをしてきましたっていう引継ぎを中学にしていく、これは実際の通学校区の中では成績とか6年間やったことを含めて、こんな状況の育ちですということを次の中学の担任に確実に引き継がれているものなんですか。システムのことも含めて書類的に引き継がれていくのか、どうなのかということを確認したいと思います。

北原教育長

書類として引き継がれるのは、いわゆる全体的なことですね。教科についても项目的に優れているところ、そうでないところ、それに対して、短文でこういう特徴、こういう特徴の記載であります。今のような一人ひとりの詳細について引き継ぐということはありません。全体像の中から担任が読みとって指導に生かしていく。

田畑教育委員

学年の中ではありますよね、例えば4年のクラス替えで、それまで担任をしてきた先生から担任どおしの引継ぎをする。例えば「この子は勉強はできないんだけど思いが強く1年、2年の時にこういうことをして、合唱とかしているので、リーダーとして面白味があります。」とか、それをどういうふうに活用するかは、次の先生が判断して、また、寄り添ってもらおう話だと思うんですけど、ただ、個人的なそういうものが引き継がれていくと、よりきめの細かい小学校、中学校の橋渡しができていくんじゃないかなあと。5年の頃から急に学力が落ちてきた。その理由がいろんな家庭環境だったりとかいうことをその時の担任はつかんでいるんだけど、中学に入った時にその先生の見方から「ああ、この子はできないんだ。」っていうふうになっち

やうと引き継がれていかないものがあるような気がして、今回の小中連携の中で、授業づくりを含めて人のバイパスっていうところを重点的にやってもらえるとすると、小中一貫で子ども自体も小学校で切れちゃっているわけじゃなくて、自分の思いって、先生と場所は変わるけど、引き継いでいるんだって思ってもらえると、子ども自身の安心感とか親の安心感がすごく増すんじゃないかと聞いていて思いました。

武田伊那中学校長

今、田畑委員さんのおっしゃることですけれど、基本的には全てのお子さんの情報は中学でいただいておりますし、その中で特に配慮が必要なお子さんについては、かなり細かくやり取りをしていますし、公簿なんかも長期で引き継いでいくんですけど、ただ、私たちが進めていきたいのは、例えば、小学校の先生がこの子は授業中真面目にこつこつやる子だと引き継いだとする。ところが小学校の先生と中学校の先生の子ども観というか教育観が違くと、中学の先生にとっては「これは発言できない子だ。」とか、あるいは「積極的でない。」という見方になってしまって、それが子どもさんの持っている本当の個性とか、内在する力を伸ばすことになっていない場合がある。中学には中学としての仕組みがあるので、致し方のない部分はあるんですけど、それを小学校の先生と中学校の先生が同じ子どもの見方、子ども観というか授業観というか、そうしたものを持つことによって、その子の持っている伸びる芽をより伸ばせるんじゃないか、そういうことをしてまいりたいということでもあります。

白鳥市長

あと、例えば、小学校、中学校で個人の力をだんだん伸ばしていきましょうということと、親御さんからしてみると成績のこともあると思うんだよね。その成績のことで言えば、中学を卒業すれば高校受験があると、その時に高校受験の点数が足りなくてというままで行ってしまう心配はあると思うんですよね。その辺をどういうふうにカバーできるのか。総合学習小学校版、中学校版、同時に成績も伸ばしていかなきゃならん。そこら辺のところはどういうふうになるのかね。

武田伊那中学校長

私もかつて伊那中学校に教諭としておまして、その時のデータを取っておけばよかったと今でも思っているんですが、これは伊那中のほとんどの教員が感じていることだと思うんですが、小学校も3～4クラス学年にあるので、失礼な言い方になるかもしれないですけど、総合学習をうんと深めてきたクラスとまあそうでもないクラスがあると、その中で総合学習を本当にはまってやってきた子どもたちは、中学に来て伸びるという感覚がある。伸びるという以上に中学3年の今の時期から本当に踏んばらなければいけない時に踏ん張る力があるというか、ここで頑張らなければいけない時に頑張れるという感触を持っているんです。ですから、中学側がずっと総合学習をやってきた子どもたちをいかににより伸ばすかという視点にもなっていくし、そういう意味では、市長さん言うように中学の出口っていうのは重要なポイントだと思っています。

白鳥市長

そこら辺が、例えば、総合学習をやった学校あるいは学年と、小中学校と総合学習をやって来てこれからの伸び代が違うよということがデータとして明らかになってく

れば、これはこちらの方に展開しなきゃいかんというふうになっていくと思うんだよね。30何年間やってきて、過去の結果についてはもうちょっと分析する必要があるのかなと、データ分析がうんと大事だと思うので、それから卒業した後も大事なので、どういう人生を送ったかということを実は見ていければいいのかなという気がするんだけど、このテーマについてはまとめようがないんだけど、この内容でやっていくということなんですね。

大住教育次長
そうですね。

白鳥市長
連携はいいと、具体的にどういうところをもっと研究したり検討したりしなきゃならないかはこれからやっていくということですか。

松田教育委員長
実証していただけるので、実証の結果はまた出してもらって、それについて意見交換して高めていくということが大事だと思う。これ1回だけで終わっては。

白鳥市長
そうだね。さっきから出ているようなことをもう1回整理してみて、小学校から中学校へ継続して行って欲しいようなこととか、あるいは逆のこと、あと、個人個人のカルテみたいなものについてはどのように中学校へ行って、また、違う目で見ながら伸ばして行けるのかということ。もうひとつについては成績も同時に大事なので、そこら辺のことについては、データを良く分析してみる。そんなことを整理して、もう1回次回でどうなの。これでおしまいということではないでしょう。

大住教育次長
ええ、内容を深めていくということは大事です。

白鳥市長
ほかの場面でもいいので、今日のこれを受けて、もっと話をしていかないとまずいと思うね。どうするの。

大住教育次長
時々テーマを決めてやっていますので、ご相談させていただいて。

白鳥市長
というか、ここで今話をしたでしょう。この次はどこで誰が話をするの。

大住教育次長
12月に次回総合教育会議があります。

北原教育長
実践は2月になりますので、それを検証していかないと。

松田教育委員長

授業の結果が出てからでないと、またこれと同じような話になるので、実践してもらって、そのあとどういうふうにしていくかという話し合いをした方が深まると思いますよ。

白鳥市長

そうしないと同じことをいつまでも繰り返してしまうからね。

大住教育次長

これをどうやってやるかという今の前段の話ではなくて、検証していくということですね。

白鳥市長

それはいいんだけど、今日の話を受けてもっと検討しなければいけないことがいっぱいあるじゃない。それをやる場はどこにあるのかということ。それで、それを検討したりして答えを出して、実際の授業の中で展開していくということになると思うんだよね。こういう会議ではなくて別の会議の中でさっき言ったような課題の深掘りをしていく。これはもうすぐにやっていかないとまずいと思うよ。

松田教育委員長

それは中学と小学校の校長先生に入ってもらってやればできるよ。

北野学校教育課長

窓口は小中連携推進委員会が担うのがいいと思います。

白鳥市長

ではその中でよく課題を議論してもらいながら実践ということをお願いしたいと思います。それではこのことについては、とりあえず終了して次に移りますが、両校長先生は以上でいいですね。

ありがとうございました。

(2) キャリア教育について

白鳥市長

では次にキャリア教育についてお願いします。

北野学校教育課長

キャリア教育について総合教育会議で取り上げご議論いただきたいというものであります。

まず私の方から4ページに、昨年度の職場体験学習の実施状況をまとめてあります。実施生徒数874名でした。平均実施日数は学校ごとの平均ですが、3.6日となっています。また、受入れ事業所数192カ所ですが、こちらにつきましては資料の6ページと7ページに受入れ事業所の一覧をお示ししているところです。4ページに戻

りまして、表になっているものが昨年度の各中学校の実施状況でございます。基本的には2年生が2～3日間というものが平均的なのですが、伊那中・長谷中は1・2年生で体験しております。ただ伊那中の今年度28年度については、2年生のみということですが、また、高遠中ですが2年生5日間実施しました。本年度につきましては3日間となっております。一覧はご覧いただきまして、(2)の事前学習実施状況ということですが、事前学習につきましては職場体験学習に臨むにあたりまして、働くこと、また、生き方、こちらを通じ生徒に目的意識をしっかりと持たせることを趣旨に本格的に導入してきております。昨年からはこちらも予算化して対応してきております。内訳については、本日、田畑教育委員さん、ワンプラスの活動としてお手伝いしていただいています。また、事後学習ということでも実施してきたところであります。こちら、職場体験学習実施状況を簡単に説明させていただきました。

5ページからは大きく2の郷土愛プロジェクトということで、田畑委員さん全てにおいて対応していただいておりますので、ご説明をお願いいたします。

田畑教育委員

郷土愛プロジェクトをお願いいたします。

まず、参加メンバー8ページに第4回郷土愛プロジェクト全体会メンバーということで、参画されているメンバーの名簿がございます。前段の4ページのところで伊那市のコーディネーターの傳田さんをはじめ、この8市町村の中で先進的に取り組んで参りました流れの中で、産学官という3つの団体が協力してそれぞれがキャリア教育に取り組んでバラバラな教育をするよりは、ここで郷土愛というキーワードをもとに、産学官協働してこのキャリア教育を捉え、また、活動の主体を地域を挙げてやっということうことでこういった団体構成がKOAの向山会長を中心にやってきたところで、いろいろな活動が郷土愛プロジェクトのPDCAを回す中で展開されて来ております。活動の具体的なものについて5ページにお戻りいただいて説明します。

郷土愛プロジェクト、地域住民が伊那谷を知り、歴史・文化を検証するとともに、先人たちの想いや夢を将来に受け継ぐ意識を醸成し、郷土愛を育むことを目的とした事業を産学官が連携して行い、もって地域の次世代育成及び発展に寄与することを目的としています。

郷土愛プロジェクトの全体会議、年6から8回というところで、今現在は、開催地を8市町村持ち回りで、教育委員会の会場を中心に市町村をまたいで活動しております。会議に参加するメンバーは大体48名くらいです。今年度は新たにPTAの役員が保護者の立場で加入しました。

活動内容としましては、「広報上伊那」の表紙にもなりました第3回目ですけれど、キャリア教育産学官交流会というのを年1回、キャリア教育を地域を挙げて考えるイベントとして企画して実施しております。子どもたちの人間形成には地域に生きる人との関わり、地域の自然、先人、産業及び文化からの学びが欠かせないこと、幼児期から社会人までを見通したつながりのあるキャリア教育が必要なことを学び合い、上伊那地域全体(学校、家庭、産業界、行政、地域)で郷土愛を大切にしたい次世代育成と地域振興を推進し、日々の実践につなげる機会にするということで、過去3回行われて来ました。まず、第1回目は、26年度5月27日に技術形成センターで実施しました。これはパネルディスカッション形式で企業のオーナーをお呼びして起業家精神を含めて皆で受講するという形式で行われました。88名の参加でした。第2回目、いわゆる産学官の協働で意見交換を含めた交流会という形式になったのが第2回目

伊那プリンスホテルを会場に行われまして127名、今年、駒ケ根市が開催地に手を挙げていただきまして、283名ということで、年々参加者の賛同をいただいて、交流の場として展開してきております。開催の会場であるとか、参加される産学官の動員の構成の人数の均等化だとかいろいろ課題も上がってきておりますが、毎回その課題に対して新しいアイデアでクリアしながら会場の中でより中身の深い交流会を展開したいということで行っております。

2つ目のテーマとして夢大学という企画を行っています。これは、生徒、保護者、教職員、産業界関係者を対象に、夢を大きく学ぶというコンセプトで上伊那地域全体をキャンパスに見立て、地域の人、産業、文化歴史を通して郷土を知り、学ぶ企画ということで、全3回行ってきております。まず伊那市の事業所を見学して回るということで、それぞれの企業の企業研修のテイストをベースに企業の人育てのあり方について学んでいただくということで、数々の企業の人事担当者が企画しまして84名の学生さんの参加で企業内で行いました。2年目は中学校の生徒に特に技術部の生徒に募集をかけましてクラブ活動でものづくりに取り組んでいる生徒を中心に50名の声かけをし、サン工業でめっき体験であるとか、山荘ミルクさんで食についての勉強だとか、菓匠shimizuさんの店舗づくり、チーム作りのお話であったりとか、KOA木工舎の森づくりの話などを回りながら会場づくりをして行いました。今年については、8月1日月曜日に駒ケ根市の企業さん、そして、4月開校しました南信工科短期大学を会場に55名参加し行いました。郷土愛プロジェクトの今まで行ってきた取り組みは以上なんですけど、今新しい取り組みとして③④⑤と上がっております。「伊那谷学」、先程も出ておりましたが、県高校レベルで言うと「信州学」になると思うんですけど、その辺を支援できる体制づくりを地域を上げてやっていこう。それから、「伊那谷人材育成ラボ」ということで、これは伊那谷を学ぶ、若しくは教える、伝えるというスタンスで、学校の先生に限らず企業の中の人事担当者であったり、いろんな意味で人の教育に携わる人が学校の教員との懇談を通して人育てを学ぶという、ちょっと面白いことを中心に企画されております。資料の12ページになるかと思いますが、伊那中学校でモデルケース的に郷土愛プロジェクトで実験的にやってみようということで、～伊那谷のたからものを発見～を中学校でフェスティバル形式でやってみようということで、企業参画したブースを中心とした地域の企業であったり、思いを持った社会人、大人と出会ってもらう1日にするというので、詳細の計画が立ち上がって、実行委員会も立ち上がったところです。

白鳥市長

はい、今の説明ですけれど、キャリア教育について様々なご意見をいただきたいと思っております。どうでしょうか。

松田教育委員長

ちょっと教えていただきたいんですけど、文科省から伊那市の教育委員会が表彰されていますよね。その時の表彰の視点はどういうところにあるんですか。

北野学校教育課長

優良教育委員会ということであったわけですが、視点ですね。少し時間をください。

白鳥市長

ほかはどうでしょう。

松田教育委員長

産学官共同でやっていることに対してではないかと思うんですが。

北原教育長

内容はそうです。実際にはそちらの方を前面に出していったんですけど、表彰対象の中に産学官がないということで、教育委員会が代表していただいたということで、今、立ち上げていただいた内容で継続されていることに対しての表彰です。

北野学校教育課長

そうですね。産学官連携の取り組みとしての表彰です。

白鳥市長

はい。まさに、今やっていることが3年前に表彰の対象になったということだね。キャリア教育を伊那市が先鞭をつけて始めて、だんだん広がって上伊那全域になっている、もっと言うと長野県の中でも上伊那がトップランナーになっていると思うんですね。これをさらに加速化させていくということで、最初の話にあったように子どもたちがこの地域で生きていく、そこに結び付けられれば一番いいと思うので、キャリア教育についてさらにこんなことをやったらどうかとか、そんな意見を出していただきたいと思います。

松田教育委員長

冒頭、市長さんの方から企業が郷土愛教育に取り組むようになったという話がありましたね。そういうのは、信州教育はと問われたときに、まず、ひとつは子ども観、子どもは無為にそこにいるのではなく常に求め続けているという子ども観、ふたつ目が限らない土着性、つまり、子どもの学習材を郷土に求めるということがあるんですね。そうすると、そのことは企業が郷土愛の教育を進めていくことと全く同一なわけで、企業の中でも信州教育を実践するっていうかね、そういうふうに一連化していくと非常に訴えやすいし分かりやすいと思うんですけど、学校は学校、企業は企業というのではなく、子ども観もそうだよ。社員観もそういうふうにしたなきゃいけないと思うんだけど、そういうふうにしていくと産学官が名実ともに産学官の連携というふうになっていくと思います。

白鳥市長

今、下伊那の方にしてみると、キャリア教育というよりも、むしろ、産業構造については航空宇宙を目指しましょうっていう方向なんですね。それで、この上伊那はって言うと、そういう方向ではないんですよ。むしろ、キャリア教育だとか、伊那谷学だとか、子ども達を含めてもっと経験を積ませようとしている。次元が違うんですよ。一方では「上伊那の産業をもっと伸ばそうよ。」という意見があって、今度、経営者協会とやるんですけど、それは、飯田・下伊那地方は主な産業というものがないんですよ。たまたま多摩川精機が航空宇宙のお手伝いをしているので、これをもっと膨らませようということで、上伊那の企業もいくつか含めて、そういう産業の育成が始まっているんですけど、一方、上伊那はこれだっていうものがないんですね。

弱電関係であれば、K O A とカルビコンとかいくつかあって、食品工業であれば、伊那食とか、ハナマルキとか、登喜和冷凍とか、あるいはK I T Z があつたりオリンパスがあつたり、上伊那であればエプソンの関連会社、トヨタ系列の関連会社、あと、集まりみたいなものがあつたり、医療系があつたり、多様な職種が混在しているのが上伊那なんですね。これを、それぞれの業種ごとに10%とか15%伸ばせば、その総合としての上伊那の力っていうのは、「じゃあ5年後については、10%アップにしましょう。そのような形で目指していきましょう。」と話をしているんですよ。これはこれでうまく行くと思います。その時に何が必要なのかというと、実はこの地域の企業を支えていく、あるいは考えていく、あるいは引っ張っていく、人材なんですよ。人材を求めるところっていうのは、まさにキャリア教育というところにつながってくるので、大きな循環の中で、キャリア教育とか上伊那の産業の育成だとか、この地域の大きな捉え方としては非常にいい方向だと思うんだよね。キャリア教育を外して考えられないと思う。私が少し心配しているのは、忙し過ぎないかということ。

田畑教育委員

ありがとうございます。やっているなかで3ポイントくらい思っていることがあるので、短くお話させていただきますのでお聴き取りいただければと思います。

まず、今回上伊那広域連合の就活合宿というのを企画で関わらせてもらって、自分の中で大きく価値観が変わったことが二つあって、ひとつは大学生はなんだかんだ言いながら、学力を積んだら都会に就職したくて、大きくてきれいなところに就職したいと考えているんじゃないかと、片やこっちに戻ってきてほしいという思いを持ちながら、そういう現実があると、あまり強く思い過ぎていました。今回30人の募集に対して、人が来ないんじゃないかと思っていたんですね。正直、企画の中でも人が集まらなかったら、市町村の課長のそれぞれのご息を呼んで来ようというようなくらいの思いがあつて、募集してみたら、一気に37人の応募が来ちゃったんですよ。それで、企画する側がなんとなく弱腰になっている面があつて、来た学生に聞いたんですね。すごい意見を持っている優秀な子がいて、「もう大学1年の頃から先輩の就職している企業を見学に行く。素敵なビルの中にジムもあるし、バーもある素敵な会社に就職して、みんなこぎれいでおしゃれで6時から11時頃までぼっちり仕事していいなあと思ったんだけど、50歳以上の人がないことに気が付きました。」それから「結婚して子どもたちを育てるという状況になった時に、果たして自分が6時から11時まで、働きやすいしおしゃれだし、充実しているかもしれないけれど、子どもとの生活臭が全然感じられない。」と、あと「30年以内に首都直下型地震が起きる可能性があるじゃないですか。」「いくつだよ。」って言ったんですが、「そういうことを総合的に考えると、リニアが来てオスプレイが商業化されたりすることを考えると、距離感を考えずに生活の場を求めることに価値があるような時代が来ると思うんです。」って、大学生の中で一人だけでなく思っている奴がいるっていう新鮮な喜びが今回の合宿の中に入れて、「戻ってきたい。別に企業に就職しなくても自分でプロジェクトを起こしてもいいと思っています。」って言うような子が30何名中、強列な奴がひとりいて、賛同している子も数人いたというのは、大きく期待を裏切られた部分で、「求められているんだなあ。」そういう発信、「合宿に参加して何が良かったか。」と言うと、「伊那谷に就職できる企業は10くらいしかないと思っていた。でも今回こんなに大学生に来てほしいと思っている人がいるんだっていうことを知った。」ということで、いかにPR不足かということを感じたということと、

あと、残念ながら、毎年大学生を採用できる企業ばかりでなく、今回企業にお声掛けした時に「いや、もう諦めているんです。うちは、5年に一遍、10年に一遍、5人はいらないうたよね。でも、一人は欲しい。5年に一遍は、学んだリーダーになれるような子を一人取りたいんだけど、いわゆる企業がやっている求人情報誌に載せると、いっぱい来るけどほとんど取れない。もっと、良くマッチングしてくれるような場所があれば、手を挙げたいと思うんだけど。」でも、それも弱腰になっていて、来てくれたところと来てくれないところがあったんですけど、来てくれたところは「こうして、大学3年生くらいで出会わせてもらって、1年経って就活の時にもしかしたら戻ってきてくれたら、変に就活、就活でない事前の触れ合いみたいなことの中で人として知ってもらって、あなたと一緒に仕事をしたいっていう大学生が戻ってきてくれるところにエネルギーをかけられるんだったらかけてみたい。」という若い中小企業の社長とか、少人数50人くらいでやっている企業の人の想いがかなり内在しているんだなあと思いました。3点目は、今、キャリア教育のお手伝いをさせていただいて気づいたことは、もっと率先して、中学のキャリア教育もそうですけど、地元の人か企業規模とか売り上げに関係なく、「こんな思いで生活しているぞ。」という声を中学高校の頃から子どもたちに向け発信していく、これは伊那谷学に通じるかもしれませんけど、これを進めるには、学校の先生たちに知ってもらう必要があると思うんですね。国語の教材の中でこういう課題が出てきて、この教材に活かせるものづくりをやっている社長がそこにいるから、授業の中で登場してもらおうとか、要するにもっと使い勝手よく社会の人材を、先生たちのチョイスで選択してもらえるとさらに活性化するのはかなとそんな気がしています。ちょっと長くなりました。

白鳥市長

今回の就活合宿については、僕も意外だったんだよね、応募者が多くて。一方では、父兄が知らないっていう、お父さん、お母さんも知らない実情だとか、僕ら、よく考えて情報を発信しながら、それをつかんでもらうような仕組みを考えるべきだなあと、僕自身も考えたよね。この地域、伊那市だけでなくいいからね。上伊那の中であれば、どこからでも通えるからね。そういうような企業の品ぞろえをして、体験してもらおう、知ってもらおうという就活をしていくともっとこっちへ来ると思う。強烈な学生の想いというのは、自分で勉強したわけではなくて、言われたことが頭に残っているんだと思う。「30年のうちに70%の確率で直下型地震が来ます。その時はどうするんですか。」ということを誰かから聞いた。「じゃあ、子どもを育てるのも本物の自然の中で育てた方がいいんじゃないの。」と誰かから聞いているとかね。いくつかそうしたことが蓄積されて、選択肢としてはこっちへ就職しようと、そうしたことは僕らがいつも働きかけないと、実感としてできてこないと思うね。時間が来ていますが、キャリア教育についてほかに意見をいただければと思うんですが、いかがでしょうか。

松田教育委員長

ひと言、3番のところに、最近使われ出した「伊那谷学」とか「信州学」がありませんけど、例えば、「高遠学園構想」では、商工会と結んで高校生が町の祭りに出会うじゃないですか、そういう具体的な事実を通して高校生たちが町に関わることによって、町への愛着とか意識が生まれてくると思うんですね。辰野高校も赤穂高校も盛んに地域の産業と結び付けながらやっているの、もう、伊那谷、伊那では先行してや

っているんですね。だから、もっともっと勇気づけるようにやってやれば、子どもたちはもっともっと探してくると思うんです。

白鳥市長

一方では、何年かやったら手を抜くっていうことをしちゃうと、学生は毎年毎年変わってくるので、継続していくことがいかに大事かということだと思うんです。キャリア教育については、今の状態をさらに速度アップ、加速化してやっていくのと、手直しをしなければならない就活合宿についても、もっと自信を持ってやっていくと、私が質問したキャリア教育、人材的に足りているのかということはどうですか。

田畑教育委員

そこは増やしていく必要はあると思います。実は、ワンプラスも私一人でやっているわけではなくて、賛同してくれる人が出てきているので、なるべくお役を渡しながら、いっぱい同じことができる人が増えていけばいいなど、南箕輪の教育委員会にも顔を出していて、城取設計の城取社長も手を挙げてくれていて、南箕輪は彼中心に動きがあったりとか、上伊那に波及していく形に徐々に考えてくれています。

白鳥市長

いいね。小沢君だってやれるだろうし、何人もいるよね。キャリア教育の先生、指導者もだんだんに増やしていくということをお願いします。

田畑教育委員

はい。

(3) 文化振興課施設連携事業「中村不折生誕150年」について

白鳥市長

「中村不折生誕150年」をお願いします。

捧文化振興課長

平成28年度文化振興課の連携事業ということで、「中村不折生誕150年」記念展、ほかの事業を行っています。今年が、不折生誕150年にあたる年であることから、3年前から準備を進めてきました。昨年度から文化振興課という課になりまして、それぞれの施設、一層連携を進めまして、今年度から生誕150年記念展を開催しております。まず、この統一ロゴマークを作って全ての館での展示に使おうということで、昨年末作りまして、各館でご使用ください、また、この間、信毎さんにも載っていましたが、自由にお使いくださいということで作りました。これは、不折の青年期から老年期にかけての4つの写真を使いまして、主にひげを生やした歳をとった時の写真が一番知られているわけですが、不折の人生の苦労しながら苦学して大成したということを見て取れるような写真、また、若いころは非常にいい男なんですけれど、4つの写真を自由に使っていただくということで提供しております。

かつ、幟旗も4種類作りまして、現在、美術館等ではためいております。博物館にもあります。できれば街中に不折のマークや旗があつて、不折生誕150年だ、そこでやっているんだということが見えるようなかたちで始めました。

14ページになりますけれど、事業としましては、ここにずらっと並んでいるのが、連携事業の一覧になります。

まず最初に、前年度になります。2月13日に県の伊那文化会館で、プレイベントということで、県立歴史館の林学芸員に来ていただきまして、「生誕150年不折入門」という講演をしていただきました。不折の多彩な活躍の全貌をたどる講演会で、150名の聴講者が集まり、非常に人気のある、みなさん興味のあることが分かりました。

今年度、伊那市の施設、歴史博物館で3月25日から6月15日まで、観桜期に向けて「中村不折生誕150年『己を広げ己を高め』」ということで、不折の生涯を概観し、苦学の末に絵画・書の大家となった不折のそれぞれの時代の作品を展示しました。いわば、不折の生涯を見られるような展示をしました。

それから、現在やっておりますけれど、7月23日から10月31日まで、創造館でやっておりますのが「明治のイラストレーター、デザイナー、不折！」ということで、いろいろなところでやりますので、創造館ではどういう切り口でやるかということで、悩んだというか、同じようなものを並べても面白くないということで、たくさんの商品デザインや本や商品デザインの挿絵にピンポイントを当てて企画展をやってみましたところ、非常に面白くなりまして、展示品も印刷物、印刷物からスキャンしてパネルにしたようなものが多いんですけど、多分みなさん、初めて見たことがないようなものがまとまって見られるようになっていきます。ついこの間始まった美術館の方の不折展は正統派ですので、そちらと合せて見ていただくと不折の多面的な魅力が分かるような展示となっています。

8月に記念講演会、これは近代文学の研究者でSBCラジオの堀井正子さんに来ていただきまして「不折、そして子規と漱石」のお話をさせていただきました。これも平日だったんですが、200名以上の聴衆に来ていただきまして、関心の高さがうかがわれました。

先週末の9月17日から始まりましたが、美術館で生誕150年記念「中村不折展」これは、台東区の書道博物館で行われている「生誕150年記念展（前編）」の展示物をお借りしたり、また、高遠美術館に保管しているもの、書道博物館所蔵の中国及び日本の書道史研究上重要なコレクション品を展示するというので、今まで書道博物館から出たことのないものも並んでいるという非常に見ごたえのある作品展です。

それからこれから始まりますのが、県伊那文化会館の中村不折生誕150年記念「私たちのコレクション展」で、これも、県文さんに考えていただいて、同じようなものを並べるのではなく、あまりみんなが見たことのないものを並べたいということで、市内外に呼びかけ、個人が所蔵する不折作品を公募しました。伊那谷だけでなく、県外からの応募がありまして、300点以上の応募がある中から選りすぐりの70点ほどを選びまして展示する。ただ、あまりに数が多いので、第2次ということで残りの230点の中から選んで展示することもあるかもしれないということです。また、所有者の不折への思い入れも語ってもらうユニークな不折展となることが期待されており、こちらは10月15日から11月13日になります。

ですから、10月の半ばから10月末までは、創造館、美術館、県文化会館の3つの場所で「不折展」をやっております。

その他、図書館でも資料常設展示も行われています。お手元の4種類のパンフレットは、博物館は終わったものですが、中村不折生誕150年『己を広げ己を高

め』」、創造館の「明治のイラストレーター、デザイナー、不折！」絵もありますけれど看板ですとか商品の袋のデザイン、お店のマーク、雑誌の挿絵等、そういったものが並んでおります。美術館の方の「生誕150年中村不折展」これは正統派のものでございまして、油絵もあり、書もあり、また、修業時代のデッサンもあります。そして赤い紙が県伊那文化会館の「中村不折生誕150年記念私たちのコレクション展」ということで行われます。以上、こういったバラエティに富んだ企画展が伊那の街で連続して行われるということで、特に連休中には地方からあるいは東京からも来ていただける方が創造館にも多かったように思います。

最後のページにあります、今回の一連の事業にはたくさんのご協力を得まして、台東区立書道博物館、印刷博物館、中村屋サロン美術館といった博物館、美術館、礫山美術館、大手町小学校は不折が学校の先生として最初に赴任したところで、履歴書が残っているんですね。それを展示しております。あと、新宿区、企業さんとしては、中村屋、真澄、日本盛等々いろんなところからご協力をいただきましてバラエティに富んだ展示をすることができました。特にこういった連携としてやった事業ですので、内部だけでなくこういった外の展覧会とも連携ができたことで、また、今後の事業に活かしていきたいと考えております。

白鳥市長

不折展について報告なりありましたら、お願いします。

全委員（なし）

（4）その他

白鳥市長

その他について、委員のみなさんからありましたらお願いします。

全委員（なし）

白鳥市長

事務局からありましたらお願いします。

大住教育次長

日程をお願いします。次回は、12月12日を予定しておりますのでお願いします。

5 閉 会

白鳥市長

それでは以上を持ちまして、9月の総合教育会議を終了させていただきます。ありがとうございました。